

ラーシュトラクータ朝の故地

——特にその出身地域と

初期の首都について——

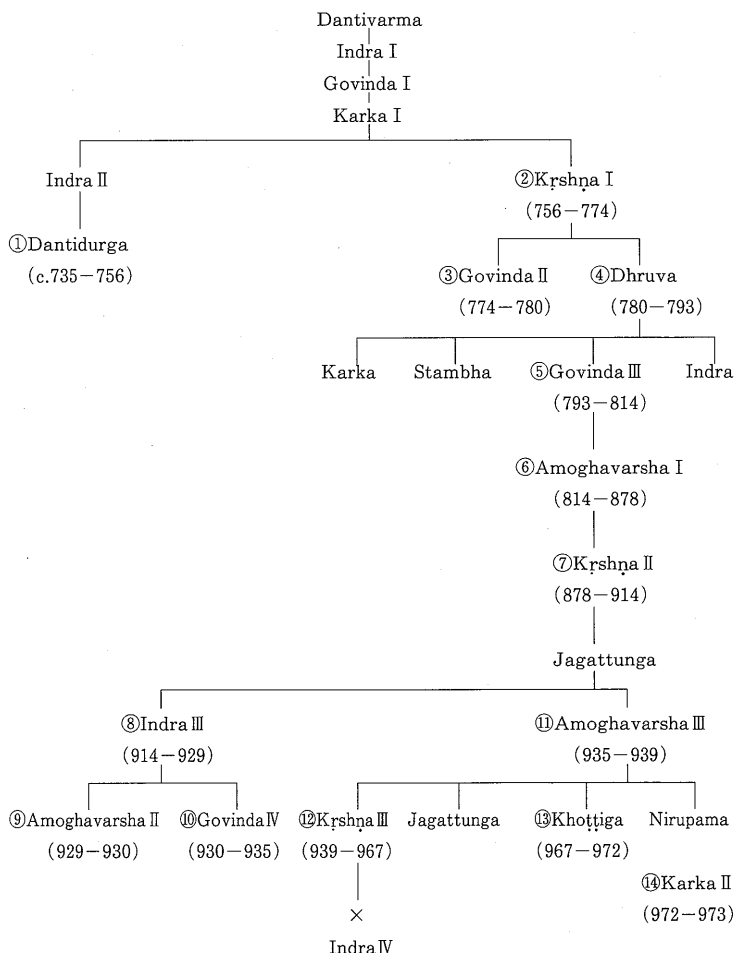
石 川 寛

は じ め に

ラーシュトラクータ朝 Rāshtrakūṭas は、8 世紀中頃から10世紀後半にかけて14代約240年にわたってデカン地方一帯を支配した王国である⁽¹⁾。4 代王ドウルヴァ Dhruva、第 5 代ゴーヴィンダ 3 世 Govinda III、第 8 代インドラ 3 世 Indra III ら何人かの王が北インドに軍事遠征し、その政治の枢要の地であったカナウジ Kanauji を一時期占拠するなど、デカン地方を出自とする国家の中でかつてない程に勢力を伸張させた。また第12代クリシュナ 3 世 Kṛṣṇa III の治世には、南方タミル地方の有力国家であったチョーラ朝の領土に深く侵攻し、やはり一時期ではあるがその首都タンジャーヴールや重要都市カーンチープラムを占拠している。文化の面では、第 2 代クリシュナ 1 世が造営したエローラ Ellora のカイラーサナータ Kailāsanātha 寺院は、単岩よりなる最大規模の寺院としてインド建築史上に不朽の名をとどめており、内外に広く知られる存在である。加えて第 6 代アモーガヴァルシャ 1 世 Amoghavarsha I の半世紀を越える治世では、首都がデカン高原のほぼ中央に位置するマニーヤケータ Mānyakhēṭa に移され、カンナダ語 Kannaḍa の文芸活動が宮廷を中心に繰り広げられて、以降のカンナダ文学隆盛の基盤が築かれている。

このようにラーシュトラクータ朝支配期は、政治的にも文化の面

ラーシュトラクータ朝系図（○囲み数字は歴代の順）



でも一時期を画する重要な時代であったとの認識が今日の南アジア史研究の上では共通のものとなっている⁽²⁾。

ラーシュトラクータ朝の包括的な研究としてはA.S.アルターカルの『ラーシュトラクータ朝とその時代』（1934年、改訂版・1967年）⁽³⁾があるが、そこで検証された問題のいくつかは、その後の新史

料の発見などによって今日再検討をせまられている⁽⁴⁾。特に従来
の研究では、その勢力の勃興や拡大の過程については不明の点を多
く残している。そこで本稿では、ラーシュトラクータ朝の第6代ア
モーガヴァルシャ1世に至るまでの王朝前半期の歴史から、主とし
て王家の出身地域とマーニヤケータ遷都以前の首都の問題を取り上
げて検討を加えることにする。

1 ラーシュトラクータという語

最初にラーシュトラクータという語の意味について検討しておき
たい。王朝の名のラーシュトラクータはもともと固有名詞ではなく、
一定地域（ラーシュトラ）の首長（クータ）を意味するサンスクリッ
ト語で、村落の長グラマクータ grāmakūṭa などと同類の用語と
して刻文に記されている。ラーシュトラは、基本的な語義としては
支配権の及ぶ範囲を示す語で、「領域」、「王国」などの意味で用い
られる。またクータは、一般に他に抜きん出て顕著なものを示す語
で、刻文中では、行政区分を示す語と結びついてその首長の地位を
表すことがもっぱらである。

この複合名詞の前半の「ラーシュトラ」が行政的な意味で使われ
た例として、古くは前3世紀のアショカ王詔勅に、マウリヤ朝の
支配下にあった南方の一地方勢力の名としてプラークリット語のラッ
ティカ Raṭṭika（ラーシュトリカ Rāshṭrika）の名がみえる⁽⁵⁾。つ
づくデカン地方最初の統一国家サータヴァーハナ朝 Sātavāhanas
期（前1世紀～後3世紀）のプラークリット刻文にも、中央権力の干
渉からは比較的自由な地位を享受した地方支配者の名称としてマハー
ラティン mahārāṭhin（マハーラーシュトリン mahārāshṭrin）の語⁽⁶⁾
がマハーボージャ mahābhoja⁽⁷⁾とならんで用いられている。また
王族が地方統治にあたった場合や、王の娘が嫁いだ地方支配者にも
これらの語が使われている⁽⁸⁾。

ラーシュトラが地方行政に関わる用語として広く用いられるよう
になるのは、ヴァーカータカ朝 Vākāṭakas（3世紀～6世紀）のサ
ンスクリット刻文においてである。同王朝下では、ラーシュトラが

ラージャ *rājya* とともに領域内で最大の行政区画の名称であり、その下位の区分としては多くヴィシャヤ *vishaya* の語が用いられていた⁽⁹⁾。

これ以降のデカン地方の歴史の中では、ラーシュートラの語が特にサンスクリット刻文において頻出するようになる。しかしその用例は必ずしも一定せず、中央権力の規制が強くはたらく場合には国家の行政区画や管轄の役人の名称にこのラーシュートラの語が用いられ、その強制力が弛んだ場合には封建的な諸侯などの地方支配者を表す名称として史料に現れる傾向が強い。

ラーシュートラクタータ勢力は、独立以前にはヴァーカータカ朝に続くデカン地方の統一国家であったバーダーミのチャールキヤ朝 *Chālukyas* (6世紀～8世紀) に、地方統治の任にあたった諸侯の一つとして従属していたが、チャールキヤ朝の支配下では地方行政区画の一つの名にこの語がみえる⁽¹⁰⁾。また、王勅が發布される際にその告知の対象として掲げられる役人の名に、グラーマクタータとともにラーシュートラクタータがあるが、いずれもそれを記した刻文の数は多くない⁽¹¹⁾。むしろこの時代で注目されるのは、デカン地方のほぼ全域を領有した最盛期のプラケーシン 2 世 *Pulakēśin II* のアイホレ碑文⁽¹²⁾の中に、ラーシュートラの語にその大きさを強調する「マハー」の語を冠したマハーラーシュートラカ *mahārāshṭraka* という語が使われていることである。プラケーシン 2 世の王国が、「三つのマハーラーシュートラカによって構成されていて、村落数は 9 万 9000 に及ぶ」という表現がそれである⁽¹³⁾。この場合のラーシュートラは明らかに地理的に広い範囲を示す語であり、行政区画や役人に関わる語としてのラーシュートラとは別の意味合いで使われている。

このように一つの王朝でも複数の意味が併存していて限定的な解釈を与えることは難しい。いずれにしてもラーシュートラは、その指示する範囲は場合に応じて広狭様々であったことが想定されるが、ある政治体制の内部で特定地方の統治に関わる語として用いられたことは確かである。

ラーシュートラクタータ朝という王朝名が定着した⁽¹⁴⁾背景にも、そ

の独立以前の一族が宗主チャールキヤ朝の支配下で「ラーシュトラ」の語を付して呼ばれる特定地域の統治を委ねられていた事実があったと考えられる。そして8世紀前半の宗主の弱体化に乘じダンティドゥルガ Dantidurga が独立王国を興したが、その勢力拡大の拠点となったのは、後に検証するように、マハーラーシュトラ南部から中部にかけてのマラータワダー Marāṭhavādā と呼ばれる地域であったと推定される。マラータワダーは今日のオスマナーバード Osmanābād 県、ナーンデード Nāndēd 県、パルバニー Parbhani 県、ビール Bir 県、アウランガバード Aurangabād 県からなっている。管見の限りラーシュトラクータ朝の出身地域、すなわち独立王朝樹立の過程で最初の拠点となった地域をマラータワダーとみなす研究はほとんどないといってよい⁽¹⁵⁾。この推定が正しいとすれば、王家の名称は地方支配者⁽¹⁶⁾であった時代に、右の地域がチャールキヤ朝下で一つのラーシュトラを構成しており、一族が首長としてその統治にあたっていたことに由来していると解釈できよう。

2 出身地域

ラーシュトラクータ朝の出自については、従来様々な説が提示されてきた。

- [1] テルグ語を母語とする人びとで、アーンドラ地方のレッディ Reddi と同一の集団を出自とする、というバーネル A.C.Burnell 説⁽¹⁷⁾
- [2] 北インドのラージプート Rājput⁽¹⁸⁾ のラトール Rathor の祖先であるとするフリート J.F.Fleet 説⁽¹⁹⁾
- [3] マラーティー語を母語とし、後のマラーターの祖であるとするヴァイディヤ C.V.Vaidya 説⁽²⁰⁾
- [4] カンナダ語を母語とし、カルナータカ北部からマハーラーシュトラ南部にかけての地域の出身であるが、マハーラーシュトラ北部に移住して勢力を伸張させたとするアルテーカー A.S.Altekar 説⁽²¹⁾
- [5] 北インド出身の戦士集団（部族）がマハーラーシュトラに南



ラーシュトラクータ朝関係地図

下して定着し、そこから勃興したとするバンダールカル R.G. Bhandarkar のアーリヤ起源説⁽²²⁾など主要なものでもかなりの数にのぼる⁽²³⁾。

その各々について詳述する紙幅がここにはないが、考察の上で第一の重要な手がかりとなるのは、創始者ダンティドウルガ自身が發布した王勅を記す銅板文書の発見地と文書中の地理的記述である。

現在三つの文書が知られているが、それらはマハーラーシュトラ州アウランガバード県のエローラ⁽²⁴⁾、同州ターナー Thānā 県のマノール Manor⁽²⁵⁾、同州コールハプール Kolhapūr 県のサーマンガード Sāmangād⁽²⁶⁾から見つかった。文書ではいずれも発見地や

その近隣の地に関する記述がなされており、その地理的範囲はグジャラート南部からマハーラーシュトラ南西部へと南北に広がっている。したがって、王の特定地域へのかかわりのみをそこから証することは難しい。

次に検討すべきものとして、諸王が自らの出自について述べた文脈の中での「都市ラッターラ支配者」Laṭṭalūrapurādhiśa、Laṭṭalūrapura-parameśvara という表現がある⁽²⁷⁾。

上の〔2〕説の主張者フリートはこのラッターラをマディヤ・プラデーシュ州ビラスプル県のラタンプル Ratanpur に同定している⁽²⁸⁾。そしてラーシュトラクータ王家の出身地はこのラタンプルであり、この王朝はそれが位置するインド中央部から南のデカン地方へと勢力を拡大したとの見解を示した。また、後のラージプートのラトール族の名称をラーシュトラクータの語が転訛したものであるとみて、その淵源をダンティドウルガの政治的發展に遡らせて理解している⁽²⁹⁾。

しかし、ラッターラはアルターカルが示しているようにマハーラーシュトラ州南部オスマナーバード県のラートゥール Lāṭūr⁽³⁰⁾に同定するのが妥当であると筆者は考える。その理由として、王家の母語がカンナダ語である可能性が高く、ラートゥールは当時はカンナダ語地域に含まれていたことがあげられる。それを証するものに、冒頭で触れたように9世紀のアモーガヴァルシャ1世の時代に宮廷ではカンナダ文学が隆盛となること⁽³¹⁾、王自身もカンナダ語による現存最古の詩論・修辞論『カヴィラージャ・マールガ Kavi-rāja-mārga (詩人王の道)』の作者と目されること、同じくラーシュトラクータを自称する一族⁽³²⁾でグジャラート南部の地方支配者の刻文が、本文が原ナーガリーの書体で記されているにもかかわらず、王の署名の部分は原カンナダ文字で記されていること⁽³³⁾などがある。

『カヴィラージャ・マールガ』の中には、当時カンナダ語の話されているのは、北のゴダーヴァリー川と南のカーヴェーリ川に挟まれた地域であるとの記述があり⁽³⁴⁾、ラートゥールとの同定はこ

の点にも合致している。

対して〔1〕説のテルグ語は、カンナダ語と同じくドラヴィダ系言語で、最古の刻文が7世紀に遡るとはいえ、その文芸活動が振興をみたのは11世紀の東チャールキヤ朝の宮廷においてである。同様に〔3〕説のマラーティー語による刻文の現存最古のものは10世紀、文学作品は13世紀にまで降らねばならない。年代の面からみてもカンナダ語を母語と考えるのが最も無理がないといえる。

さらに、後代ラーシュトラクータを自称しカルナータカ州北部ベルガウム Belgaum 県のサウンダッティ Saundatti 周辺を支配した一族の刻文では、その祖先をクリシュナ3世に結び付けての「首都カンダラの支配者 Khandara-puravarādhiśa」という表現が、「都市ラッターラ出自の者 Laṭṭalūrapura-vinirgata」という句とともに記されている⁽³⁵⁾。アルテールは、このカンダラを単なる想像上の都市、あるいは実在したとしてもラーシュトラクータ主家のクリシュナ3世とのみかわりをもつものとして何ら重きを置いていない⁽³⁶⁾。しかしカンダラはその後の研究によって、マハーラーシュトラ州でオスマナーバード県に隣接するナーンデード県のカンダール Kandhār に同定されている⁽³⁷⁾。後世の一族の刻文であるとはいえ、出身地をラッターラ（ラートゥール）、クリシュナ3世時の首都をカンダラ（カンダール）とするこの記述は、本稿の課題にとって重要な意味をもつと筆者は考える。すなわち、サウンダッティの一族がクリシュナ3世と血縁関係にあったことが有力視されていることに加え、カンダールとラートゥールとが近隣にあるその位置関係からみて、前者が王朝勃興期にも重要な拠点都市のひとつであった可能性は大きいからである。実際カンダールの町邑址からはクリシュナ3世自身の碑文が発見されていて、少なくとも王朝後半期には栄えていた都市であることが確かめられた⁽³⁸⁾。アルテールの研究ではこのカンダール碑文は考察の対象に入っていないので、その重要性を見逃す結果となっている。

先述の様にアルテールは、ダンティドゥルガの活動の範囲が、グジャラート、マールワー、中央インド、マハーラーシュトラ北部

に限られるとした上で、この王は本拠地をマハーラーシュトラ南部のラトウルから、マハーラーシュトラ北部からグジャラート南部にかけての地域に移動させたとの見解を示している。確かにダンティドゥルガの母バヴァガナー Bhavagaṇā が、8世紀初頭にグジャラート地方に勢力をもったチャールキヤの一族から略奪婚 *rākshasa vivāha* によって連れてこられた事実⁽³⁹⁾が端的に示すように、初代王とグジャラートやマハーラーシュトラ北部との結びつきは明白である。しかし前述のサーマンガード銅板文書に記されたコールハプール周辺への支配権力の行使をみる限り、マハーラーシュトラ南部を放棄して勢力範囲を北へ移動させてしまったとの結論はやはり受け入れ難い。

筆者は、基本的にはカンナダ語を母語とするアルテカル説が最も蓋然性が高いとみなしているが、本拠地の移動に関しては上のような疑問をもっている。ラッターラやカンダラの先の同定に依拠し⁽⁴⁰⁾初代王の活動の範囲を考慮するならば、その出身地域は前に触れたようにやはり今日のオスマーナード県、ナーンデード県からアウランガバード県にかけての一带、マラータワダーと呼ばれる地域にそれを求めることができると考える。ラッターラやカンダラばかりでなく、王朝最大の寺院であるエローラ石窟もこの地域に位置していることからみても、王朝前半期には中心拠点の大きな移動はなかったと筆者は判断している。独立王国樹立前後には、そこからさらに北方や西方へも勢力を拡大していたと考えるのがより妥当である⁽⁴¹⁾。

加えて上述のように母語はカンナダ語の可能性が最も大きいとみられるので、先の諸説のうち、[1] バーネル説、[2] フリート説、[3] ヴァイディヤ説、[5] バンダールカル説には、合致し得ない点が残る。

3 マーニヤケータ以前の首都

ラーシュトラクータ朝の首都をマーニヤケータ（現マールケード Mālkhēḍ、カルナータカ州グルバルガ Gulbarga 県）に定めたのは、歴代

王の中で最も長い治世を誇ったアモーガヴァルシャ 1 世である⁽⁴²⁾。

それ以前の首都がどこに置かれていたかは現存史料に明確な記述がなく、未だ解明されていない⁽⁴³⁾。

従来の研究では、マユーラカンディー Mayūrakhaṇḍī、ナーシク Nāsik、プラティシュターナ Pratishṭāna、エリチュブル Elichpur、エローラなどが首都として指摘されてきた。

マユーラカンディーは第 5 代ゴーヴィンダ 3 世の刻文に、王勅の発布地としてしばしば記されている。アルテールは、この地を銅板文書の発見地ワニ Wani (マハーラーシュトラ州ナーシク県) の北の丘陵に位置する城塞モルキンダ Morkhind に同定するビューラー G.Bühler やフリートの見解を支持しながらも、首都とするにはあたらなとしている。その理由として、マユーラカンディーに続く語 samāvasitena は「宿営地から(発布する)」の意であって、「首都(住居)から」の意の vāstavyena とは異なる点をあげている⁽⁴⁴⁾。文書の伝える寄進村落アンバカ Ambaka (現アンベー Ambe) は、発見地ワニやモルキンダの比較的近隣に位置しているが、それが行政区画ヴァタナガラ・ヴィシャヤ Vaṭanagara-vishaya の中にあり、さらに上位の区画ナーシク・デーシャ Nāsik-deśa に属していると記されている⁽⁴⁵⁾。

古代・中世デカン地方の諸王朝では、首都およびそれを取り囲む王国の中心地帯は直轄の地域で、通常、地方行政区画のうちに含まれることはない⁽⁴⁶⁾。その面でもマユーラカンディーを首都とみなすことには矛盾が生じることになる。

筆者も、マユーラカンディーがモルキンダであるとすれば、宿営地として以外には考えにくいとみているが⁽⁴⁷⁾、それを首都とみなした場合に同定地としてモルキンダより相応しいのはカルナータカ州ビーダル県のモールカンディ Mōrkhaṇḍī である。第一にその位置は先のラートゥールやカングールに比較的近いばかりでなく、後の首都マーニヤケータにはきわめて近い位置にあることもその政治上の重要性を示すものと考えてよい⁽⁴⁸⁾。次に理由として挙げられるのは、王朝の地方行政区画には含まれていない点である。先述の

ワニ銅板文書の他にマユーラカンディーを発布地とする王勅を記す刻文の中で、寄進村落の属する行政区画として挙げられているのは、アチャラプラ・ヴィシャヤ Achalapura-vishaya⁽⁴⁹⁾、ダーラウラ・ヴィシャヤ Dhāraura-vishaya⁽⁵⁰⁾、マーナカ・ヴィシャヤ Māṇaka-vishaya⁽⁵¹⁾、ラーシヤナ・ヴィシャヤ Rāsiyana-vishaya⁽⁵²⁾、ムルンバ・ヴィシャヤ Murumba-vishaya⁽⁵³⁾、イディグール・ヴィシャヤ Idigūr-vishaya⁽⁵⁴⁾、の六例である。最後のイディグール・ヴィシャヤを除く⁽⁵⁵⁾五例は、それぞれ順にマハーラーシュトラ州のアマラーヴァティー Amarāvati 県、ビール県、アコーラー Akolā 県、アフマドナガル Ahmadnagar 県、アコーラー県に位置することが判明していて、いずれもモールカンディのあるビーダル県とは境を接していない。加えてモールカンディが特定の地方行政区画に属しているとする記述例もない。首都としての条件はモルキンドよりもモールカンディの方がよく満たしているのである。またそこが軍事遠征の際の宿营地であったとするならその回数は多きに過ぎると思われる。

王勅の発布地と寄進村落の地理的位置関係は、必ずしも発布地の政治的重要性を直接的に明らかにするものではないし、マユーラカンディーの現在地として最有力のモールカンディからその重要性を裏付ける史料が得られているわけでもないが、それでも上の諸事情は、マユーラカンディーが首都であったと断定するに足るものではないにしても、少なくともゴーヴィンダ3世にとっての最重要地であったことを明らかに示しているものといえよう。

ナーシクもまた、上のワニ銅板文書にナーシク・デーシャという地方行政区画の存在が示されているので、王朝の地方統治の一つの中心であったことは判明するものの⁽⁵⁶⁾、首都とは考えられない。

加えてプラティシュターナも、ゴーヴィンダ3世の794年の王勅がそこから発布されているが、その記述から明らかに宿营地であり、プラティシュターナ・ブクティ Pratishtāṇa-bhukti という行政区画の中心都市でもあって、首都でないことは確実である⁽⁵⁷⁾。

エリチュプルを首都と考えたのはアルテールで、先述のように、

ダンティドウルガの活動の範囲を北部マハーラーシュトラからその以北のグジャラート、マールワール、中部インドに限り、ラッターラやコールハプールのあるマハーラーシュトラ南部を除外している。エリチュプルは当然前者の範囲内にあるが、6世紀後半から8世紀にかけて、エリチュプルの位置するベラール Berār 地方（今日のマハーラーシュトラ州アマラーヴァティー県周辺）は、同じくラーシュトラクータを自称するナンナラージャ Nannarāja が支配している⁽⁵⁸⁾。

アルテカルはこの一族とダンティドウルガが血縁関係にあった可能性が大きいと推測し、その関係に依ってダンティドウルガのラッターラからエリチュプルへの移住を想定しているのである。その根拠として、両家の印章が共にヴィシヌ神の乗物（ヴァーハナ vāhana）の神鳥ガルダ Garuḍa であること、支配者の名に共通する点が多いこと、年代的にも大きく重なっている上に支配地域も隣接していることなどをあげている⁽⁵⁹⁾。

確かにラッターラの位置するマハーラーシュトラ南部から南隣のカルナータカ北部の地域には次王のクリシュナ1世即位の当初にも、勢力は縮小したものの依然としてチャールキヤ朝のキールティヴァルマン2世 Kirtivarman II が影響を及ぼしている一帯があり⁽⁶⁰⁾、新王国樹立はそこから距離を隔てたマハーラーシュトラ北部に拠点を置く方が好都合であったという事情は肯首できる。しかし現時点ではそれを証する史料は存在しないし、むしろ既述のように、エリチュプルはラーシュトラクータ朝時代にはアチャラプラと呼ばれ地方行政区画アチャラプラ・ヴィシヤヤの中心都市としてゴーヴィンダ3世時の文書に記されているのである。さらにダンティドウルガの独立後にナンナラージャの王統がどのようなになったのかも明らかではない以上、新王朝がエリチュプル周辺を支配下に収めた可能性は大きいとしても、後者に代わってその旧都を自らの首都に定めたとするのはやはり早計に過ぎよう。

エローラ首都説は美術史家のクーセنز H. Cousens によって提唱された。クーセنزはその著『チャールキヤ朝時代の建造物』の中で、エローラ石窟の北隣に町邑の址と大きな貯水池があることに

注意を喚起し、それがかつてのラーシュトラクータ朝の首都であったとの見解を示した⁽⁶¹⁾。マラータワダー地域北部のアウランガバード県にあるエローラ石窟寺院は、30を超える石窟および岩石寺院からなる一大宗教建造物で、6世紀から10世紀にかけて開鑿された。ラーシュトラクータ朝は造営の中心的な担い手であり、初代ダンティドゥルガはダシャヴァターラ（「ヴィシュヌ神の十化身 Daśāvatāra」）石窟を開鑿、冒頭に述べたように次王クリシュナ1世はカイラーサナータ寺院を造営している。その背景に、シヴァ神の住処であるカイラーサ山を自らの王国の中心（首都）に移すという意識があり、それによって王国が世界の中心でもあることを宣言する意味合いを有していたとの解釈がある⁽⁶²⁾。支配理念の表明としての、王朝による建築や彫刻の造営の精神史的研究は、史料の必ずしも多くないインド古代・中世史研究に新しい視野を開くものとして評価できるが、やはり歴史的な事実との綿密なつき合わせが不可欠の作業となる。その面ではまだ端緒についたばかりであり今後の進展を期さねばならぬ点が大である⁽⁶³⁾。

上の解釈ではエローラが首都ということになるが、この点についても少し検討してみよう。エローラから発見されたダンティドゥルガの銅板文書は独立前後の742年に作成されたものであるが、そこには王の征服事業が北インドばかりでなく、カーンチープラムやスリランカにまで及んだと記されている⁽⁶⁴⁾。南インドの征服は明らかに誇張だとみなしてよいが⁽⁶⁵⁾、少なくともその時点でマハーラーシュトラ北部からグジャラート南部を支配下に収めていたことは、文書中の寄進村落の記述からみて疑いない。

カイラーサナータ寺院は、ピラミッド形の本殿屋根（śikhara シカラ）を有するドラヴィダ様式の建造物としての最高峰に位置付けられているが、様式の先駆として範をパツラヴァ朝下カーンチープラムのカイラーサナータ寺院、チャールキヤ朝下パッタダカルのヴィルパークシャ寺院に仰いでいる。両寺院がいずれもそれを造営した王国の首都もしくはそれと並ぶ最重要地に建てられていることをみれば、エローラ周辺も王国にとっての心臓部であった可能性は否

定できない。

すなわち現時点でエローラを首都と断定することはできないが、その規模の壮大さと長期間にわたる造営などからみて、それが首都を遠く隔てた僻遠の地にあったとは考えにくいのも事実である。少なくとも国家成立の初期にあっては、その支配権の正当性を自他ともに誇示する一大モニュメントとして、王国統治の中心地近くに立地していたと考えるのが妥当である。

以上のようにマーニヤケータ以前の首都について提起された様々な見解、特にマユーラカンディーとエローラに関してはそれぞれ検討に価する事情があるが、いずれも明確な証拠を欠いているのである。

そこで現段階では、以下の諸点を首都問題考察の際の確認すべき事項として指摘しておきたい。

- [1] アモーガヴァルシャ 1 世によって首都がマーニヤケータに定められる以前の首都については明確な結論を出すのが難しいこと。
- [2] エローラやマユーラカンディーのように首都としての要件を部分的には満たしていると思われる場所もあること。特に後者はゴーヴィンダ 3 世の時代に多くの王勅がそこから発布されており、なおかつそれが軍事遠征の際の宿営などとは記されていないことからみて、王が通常はそこに居住した場所、すなわち王宮が存在した場所である可能性が高いことを指摘できる。しかしながら他の王の刻文にはマユーラカンディーは記されておらず、前半期を通じて首都であったとみることはできない。
- [3] ダンティドゥルガヤクリシュナ 1 世の治世にはエローラ、ゴーヴィンダ 3 世時にはマユーラカンディーといったように王ごとに支配上の中心地が移動した可能性も考えられる。
- [4] マーニヤケータは、それ以前の首都の候補に上がった上述の諸都市と較べると最も南のカルナータカ州グルバルガ県に位置している。その理由として考えられることの一つに、王国の南部地域における統治体制の問題がある。ここに詳述するいとまがない

が、例えば前代のチャールキヤ朝期より重要な地域であったカルナタカ南西部のバナヴァーシ地方が、バナヴァーシ 1 万 2000 という名称の行政区画として位置付けられ、アモーガヴァルシャ 1 世以降、その統治がチェッラケートナ家 Chellakēṭanas という忠実な封臣に委ねられる。そして同家による統治が王朝末期に至るまで安定して続いた事実をあげることができる⁽⁶⁶⁾。

[5] マーニヤケートは、かつての宗主チャールキヤ朝の首都バーダーミと、2 章で検討したラーシュトラケート家の出身地として有力なラッターラ^ラのほぼ中間に位置している。アモーガヴァルシャ 1 世以降カンナダ語による宮廷文学が隆盛に向かったことを考え合わせるなら、首都の位置とそれを取り囲む王国の中核地帯の安定化が、前代の文化の継承と土着文化の繁栄に大きく寄与したことが考えられる。

[6] マーニヤケートがアモーガヴァルシャ 1 世以前にも重要都市であった可能性は考えられるが、現在それを証する史料はみつかっていない。

お わ り に

最初に述べたように、ラーシュトラケート朝期は、タミル地方のチョーラ朝と併せて南インドを出自とする王朝の勢力がかつてないほどに伸張した時代である。しかしその統治の前半期には上でみたように解明すべき多くの問題が残されている。

王朝の領土となったデカン地方は、古来北インドの先進的なサンスクリット文化と南のドラヴィダ文化とが接触し独自の文化を開花した地域でもある。本稿でその一端に触れたドラヴィダ様式建築の発展やカンナダ文学の隆盛もそのような状況の中で展開したものであり、政治史上の諸問題の解明と相俟ってその社会的・経済的背景の検証が今後の研究課題として要請される。

この小論が研究進展の一助となれば幸いであり、大方の御教示をお願いする次第である。

略号

CII: *Corpus Inscriptionum Indicarum*

EI: *Epigraphia Indica*

ASWI: *Archaeological Survey of Western India*

IA: *Indian Antiquary*

BG: *Bombay Gazetteers, 1886.*

HMHI: *History of Medieval Hindu India, 3vols, Poona, 1921-26.*

IHQ: *Indian Historical Quarterly*

JBBRAS: *Journal of Bombay Branch of Royal Asiatic Society*

Altekar · a: *Rāṣṭrakūṭas and their Times, Poona, 1967.*

Altekar · b: *"Rāṣṭrakūṭa Empire and its Feudatories", Maharashtra State Gazetteers, 1967.*

註

- (1) 諸王の年代については、別に掲げた歴代王の系図を適宜参照されたい。
- (2) 一例としてインド共和国の高等学校の教科書である、Satish Chandra, *Medieval India: A History Textbook for Class XI*, National Council of Educational Research and Training, Delhi, 1978. revised edition, 1990. (邦訳、サティーシュ・チャンドラ著、小名康之・長島弘訳『中世インドの歴史』山川出版社、1999年)の第2章を見よ。
- (3) Altekar · a. また、*Maharashtra State Gazetteers, 1967*には歴史篇・第7章に、同じアルターカルの“Rāṣṭrakūṭa Empire and its Feudatories”と題する政治史概観 (Altekar · b) がある。以下、同様に史料の出典および重要文献の略号については別掲の一覧を参照されたい。
- (4) アルターカルの著作以降に発見された新史料、および出版時には知られていたがその検討の対象には含まれていなかった刻文が少なからず存在する。それらは、*Journal of Epigraphical Society of India* (Mysore), *Progress Report of the Kannada Research Institute* (Dharwar) などの学会誌や研究機関誌、また Shrinivas Ritti and G.

C.Shelke, *Inscriptions from Nanded District*, Nanded, 1968. などの刻文史料集に報告されている。史料の最新のリストとして、Venkatesha, *List of inscriptions of the Rāshtrakūṭas of Maḷakhēḍ*, 1985 (not published) が、516の刻文を掲載している。近年の研究としては、ジャイナ教に焦点をあてたものではあるが、Hampa Nagarajaiah, *A History of the Rāshtrakūṭas of Malkhēḍ and Jainism*, Bangalore, 2000. がある。ただし王朝史の部分には問題が多い。

- (5) 十四章摩崖法勅 (Rock Edicts) 第5章。
- (6) 例えばカールレー Karle 石窟碑文、*EI*. VII, p.61f.
- (7) 例えばクダー Kuḍā 石窟碑文、*ASWI*. IV, p.85.
- (8) 例えばバナヴァーシ Banavāsi 碑文、*EI*. XXXIV, pp.239-42. なお、この碑文はナーガ (蛇神) 像の両脇に刻まれている。その文化史的背景については、拙稿「古代デカンの国家ーカダンバ朝を中心に」(岩波講座世界歴史・第6巻『南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店、1999年) 283頁参照。
- (9) *CII*. V, pp.xxxiv ff.
- (10) Goparāshṭra-vishaya がそれだが、行政区画としての名称はヴィシャヤであり、ラーシュトラは既に地名 (地域名) の一部となっている。ニルパン Nirpan 銅板文書、*I A*. IX, p.124. なお、ヴィシャヤはバーダーミのチャールキヤ朝の主要行政区画だった。拙稿「バーダーミのチャールキヤ朝におけるヴィシャヤについて」『史学雑誌』第96編第3号、1987年、を参照。
- (11) 註 (10) の拙稿参照。
- (12) *EI*. VI, pp.1-12.
- (13) 三つのマハーラーシュトラカおよび村落の数9万9000については、拙稿「古代デカンの政治地理」(辛島昇編『ドラヴィダの世界ーインド入門II』東京大学出版会、1994年、所収)、同「デカン地方古代諸王朝の行政区画ー主に numerical appellation の解釈をめぐる」『東洋学報』第74巻・第1-2号、1993年、を参照。
- (14) 王勅の中では、当初ダンティドウルガの4代前の祖インドラ Indra に結び付けてラーシュトラクータの語が記され、次第にそれが王朝の名

(anvaya) として定着した。それぞれの例として、ダンティドウルガのサーマンガード Sāmangād 銅板文書、IA. XI, p.112, および第5代ゴヴィンダ3世のワニ Wani 銅板文書、*ibid.*, p.138を参照。

- (15) わずかにその可能性が示唆されているのが註(4)の Shrinivas Ritti, G.C.Shelke 共編の書であるが、史料集という性格上刻文の紹介が中心でその点についてつっこんだ議論がなされているわけではない。
- (16) ラーシュトラクータを自称する地方支配者として、他に、①南マハーラーシュトラのサタラ Satara 地方のマーナプラ Mānapura 周辺を支配するアビマニユ Abhimanyu の一族、②マハーラーシュトラ北部アマラーヴァティー地方のアチャラプラ(エリチュプル) Achalapura 周辺を支配するナンナラージャ Nannarāja の一族、③グジャラート南部スーラト Sūrat 地方を支配するカルカ2世 Karka II の一族、などが存在した。詳しくは Altekar a & b を参照。①はバーダーミのチャールキヤ朝時代の初期にもその存在を示す記録がある。拙稿「バーダーミのチャールキヤ朝下の地方支配者について」『中央大学文学部紀要』史学科第32号、1987年、参照。
- (17) A.C.Burnell, *Elements of South Indian Palaeography*, second ed., London, 1878, p.10
- (18) ラージプートの政治的勃興の背景については、三田昌彦「初期ラージプート集団とその政治システム」、前掲の岩波講座世界歴史・第6巻所収、註(8)参照。
- (19) BG. I, ii, p.384.
- (20) HMHI. II, p.249.
- (21) Altekar, a & b
- (22) BG. I. ii, p.143.
- (23) 王朝後半期の諸王の詔勅には、自らの系譜をクリシュナ神の出自のヤドゥ Yadu (ヤーダヴァ族 Yādava-vaṃśa) にまで遡らせているが、これは神話の起源によって支配の正統性を主張するもので、とうてい歴史的事実ではあり得ない。この主張が最初にみられるのは、第6代アモガヴァルシャ1世の治世末の871年のサンジャン Sanjan 銅板文書である。EI. XVIII, pp.235ff.

- (24) *EL*. XXV, p.25.
- (25) *IHQ*. XXXV, pp.183ff.
- (26) *IA*. XI, pp. 110ff. 註 (14) 参照。
- (27) 例えばアモーガヴァルシャ 1 世のニルグンド Nilgund 碑文、*EL*. VI. pp.102ff.
- (28) *BG*. I. ii, p.384. フリートの記述では中央州 Central Province となっているが、著作刊行当時の行政区分にもとづくものであり、本稿では現在の区分に則って記述することにした。
- (29) 辛島昇『南アジア—地域からの世界史・5』朝日新聞社、1992年、もラージプート起源説を採る。しかし、ラーシュトラクータが新興勢力であったことはラージプートと共通するものの、その出自を山地の部族民とみなすことには疑問が残る。同書82～83頁参照。
- (30) Altekar・a, p.23. 記述はハイデラーバード州ビーダル Bidar 県。
- (31) 宮廷詩人としてナーガヴァルマン 2 世 Nāgavarman II、ケーシラージャ Kēśirāja、バツタカランカ Bhaṭṭakalaṅka の名が、またジャイナ教文学の担い手としてジナセーナ Jinasena、マハーヴィーラーチャーリヤ Mahāvīrācārya の名が伝えられている。cf. Altekar・b, p.247.
- (32) 註 (16) の③。
- (33) ナヴサーリ Naosari 銅板文書など。*JBBRAS*. XX, p.135.
- (34) Altekar・a, p.24.
- (35) *JBBRAS*. X, pp.167ff.
- (36) Altekar・a, p.22, footnote (50).
- (37) Shrinivas Ritti and G.C.Shelke. *op. cit.*, pp. 1ff.
- (38) *ibid.*, inscription No.2. なお同地からは、8 世紀の書体の奉獻銘が刻まれたブツダの像も発見されている。*do.*, inscription No.1.
- (39) *EL*. XVIII, p.235. 710年から715年の間の出来事と考えられる。この時点では、グジャラート地方ではいまだにチャールキヤの勢力の方が優勢であったと考えられる。
- (40) ラーシュトラクータ朝などのように今日の複数の州にまたがる国家の研究では、研究者自身の出身の州およびそこでの主要言語に主導権を認めてその歴史を理解しようとする傾向が顕著である。ラーシュトラク

タ朝の場合もその例外でない。したがってその検討に際しては十分な注意が必要である。しかしラーシュートラクータ王家の母語の場合は、本文に記した理由により、アルターカル以降カンナダ語説がほぼ定説となったとみてよい。例えば、K.A.Nilakanta Sastri, "The Rāshtrakūṭas", *Comprehensive History of India*, Vol. III, pt.1, New Delhi, 1981, Chapter16, もその立場で記述されている。ただしこの文献の440頁で、フリートがラッタールーラをラートゥールに同定している、とあるのは誤りである。さらに同頁註(2)は典拠に何ら該当する記述がみられないのも遺憾である。

- (41) その勢力伸張の背景に、8世紀初頭のアラブ軍のグジャラート地方への侵攻による北方の地の政治的混乱があったと諸研究が指摘している。
- (42) カルダ Karda 銅板文書、IA. XII, p.263. アモーガヴァルシャ1世以前の記録にはマーニヤケータは記されていない。
- (43) 前掲のサティーシュ・チャンドラ『中世インドの歴史』は、ダンティドゥルガがマーニヤケータを首都に定めたとしている(邦訳18頁)が誤りである。註(2)参照。
- (44) Altekar・a, p.47.
- (45) 註(14)参照。
- (46) 拙稿「チャールキヤ朝下の都市ラクシュメーシュヴァル 7代王ヴィジャヤーディティヤ時代の法規定をもとに」『インド考古研究』第20号、1999年、および註(13)の拙稿を参照。なお前者の註(57)でラーシュートラクータ朝の初期の首都をナーシクとしているが、後述のように、そこに副王の統治はみられるものの地方行政区画の中心都市であることが明らかであり本稿を以って訂正したい。註(56)を参照。
- (47) 軍事遠征の際の宿营地から王勅が発布されることは少なくない。拙稿「バーダーミのチャールキヤ朝における王勅の発布地について」『中央大学文学部紀要』史学科第31号、1986年を参照。
- (48) cf. Ishikawa Kan, *Historical and Cultural Geography of the Western Deccan, -6th to 10th Century A.D.*, Ph.D.thesis, Karnatak University, 1992, p.364. なお、V.V.Mirashi はマハーラーシュートラ州チャンドラプル Chandrapur 県のマルカンディ Markhaṇḍi に同定し

ているが、この説には、出身地域内のラートゥールやカンダール、後半期の首都のマーニヤケートなどの重要都市とかなり隔たってしまうという難点がある。*EI.* XXIII, pp.8-18.

- (49) アンジャンヴァアティー Añjanavati 銅板文書、*EI.* XXIII, pp.8-18.

なお、後述のように都市アチャラブラは現エリチュブルである。

- (50) ダールール Dhārūr 銅板文書、*EI.* XXXVI, pp.285-296.

- (51) シルソ Sirso 銅板文書、*EI.* XXIII, pp.204-212.

- (52) ラーダンブル Rādhampur 銅板文書、*EI.* VI. pp.239-251.

- (53) シルソ銅板文書、*EI.* XXIII, pp.212-222.

- (54) カダバ Kadaba 銅板文書、*EI.* IV, p.332.

- (55) イディグール・ヴィシヤヤは、はるか南のカルナータカ州トゥマクール Tumakūr 県に属している。

- (56) 副王 (yuvarāja) が統治している記録がある。ピンペリ Pimperī 銅板文書、*EI.* X, p.81; ドゥリア銅板文書、*EI.* VIII, p.182. なお、ヴィシヤヤ、ブクティ、デーシャなど行政区画相互の上下関係は明確でない。

註 (13) の拙稿「デカン地方古代諸王朝の行政区画」を参照。

- (57) パイトン Paithan 銅板文書、*EI.* III, p.103. なお、美術史家ヴィディヤ・デーヘージアもパイトン首都説をとっている。その著 *Indian Art*, London, 1997 (邦訳 宮治昭・平岡三保子訳『インド美術』岩波書店、2002年) は造形表現の背景にある歴史的・社会的諸条件に着目したすぐれた論考で、ラーシュトラクータ朝諸王の造営したエローラ石窟に関しても傾聴に価するいくつかの指摘がみられるが、首都についての見解は修正が必要である。cf. p.131 (邦訳129頁)

- (58) 註 (16) の②。その王統はドゥルガラージャ Durgarāja からゴーヴィンダラージャ Govindarāja、スヴァーミカラージャ Svāmikarāja、ナンナラージャへと継承されている。ムルタイ Multai 銅板文書、*IA.* XVIII, pp.230ff.

- (59) Altekar・a, pp.10-11

- (60) 757年のヴァッカレリ Vakkaleri 銅板文書、*IA.* VIII, p.23

- (61) H.Cousens, *Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, Calcutta, 1928, pp.1ff.

- (62) Vidya Dehejia, *op.cit.*, p.131 (邦訳129頁)、註(57) 参照。
- (63) カイラーサナータのような巨大寺院とは対照的に、王朝後半期特に第7代クリシュナ2世以降、中小規模のヒンドゥーやジャイナの寺院が王国南部各地に数多く建設されるようになるという興味深い事実がある。その意味については稿を改めて検討したいが、ここではさしあたりその先駆的な研究として次の文献をあげておく。S.Rajasekhara, *Rashtrakuta Art in Karnataka*, Dharwad, 1991.
- (64) 註(24) 参照。
- (65) 宗主のチャールキヤ朝ヴィクラマーディティヤ2世 Vikramāditya II のタミル地方への遠征に従軍した可能性はある。
- (66) Ishikawa Kan, "Formation and Governance of Banavāsi-12000 under the rule of the Chālukyas and the Rāshtrakūṭas" in L.K. Srinivasan, S.Nagaraj ed., *Sri Nagabhinandanam* (Dr.M.S. Nagaraja Rao Festschrift), Bangalore, 1995.

[付記] マラータワダー地方の地理に関しては小磯千尋東海大学講師より御教示を得た。また全体にわたり山崎元一国学院大学教授から御助言をいただいた。末尾ながら記して謝意を表したい。